

国語**【解答】**

問 1	問 2	問 3	問 4	問 5
a	b	b	c	b
問 6	問 7	問 8	問 9	問 10
a	e	e	b	a
問 11	問 12	問 13	問 14	問 15
b	b	a	c	d
問 16	問 17			
b	d			
問 18	カトリック信者にとって教会は信仰の中心であり、ゴシック建築の大聖堂はその信仰を表すものである。			

【学習アドバイス】

本学の入試は、例年、選択科目の中から2科目を選択して受験する形式を採り、試験時間は2科目合わせて100分である。各科目にかけるバランスにもよるが、平均的には1科目50分程度が解答時間となる。2018年度まで、現代文の大問が2題だったが、2019年度以後は現代文の大問1題のみとなった。課題文の文字数は、2017年度大問Ⅰ約3800字+大問Ⅱ5500字→2018年度大問Ⅰ約2000字+大問Ⅱ約2500字→2019年度約6600字→2020年度約4400字→2021年度約6000字→今年度約4200字と、年度によってばらつきがあるものの、毎年かなりの長文である。一方、総設問数は、2017年度31問→2018年度24問→2019年度以後は18問と減少傾向にある。設問数からみて受験生は余裕をもって解答を出すことができたであろうが、長文を読み慣れておく必要がある。また、国語は普通縦書きの文章なのだが、横書きの文章が出題されるので、この形式に慣れておくことも必要である。

設問形式は、5者択一の選択肢問題が17問、50字以内で解答する記述問題が1問。今年度の出題内容は、「漢字の書き取り問題」が1問、「単語の意味を問う問題」が6問、「対義語を問う問題」が1問、「単語、語句、文を入れる空所補充問題」が5問、「傍線部に関する内容を問う問題」が4問、「筆者の考えを50字以内で要約させる記述問題」が1問となっている。18問の中で、「漢字の書き取り問題」の1問と、「単語の意味を問う問題」の6問と、「対義語を問う問題」の1問、計8問が語彙力で決まる問題である。「単語の意味を問う問題」のうち3問が、「傍線部に関する内容を問う問題」のうち1問が、適切でないものを選ばせる問題であったので、解答時に注意する必要がある。以上の分析をふまえ、以下では3点に絞って具体的な学習アドバイスを示しておきたい。

第一に「語彙力の増強」である。具体的な対策は以下の3つ。①学校の教科書にのっている文章、問題集にのっている文章の中の「意味がわからない語句」をチェックし、辞書で調べ、その意味を自分オリジナルの「語彙ノート」をつくって書き貯めていくこと。「語彙ノート」に「知識」が貯まっていくのを見れば自信もついてくる。②国語便覧や現代文用語集のようなサブテキストの中で「同義語」「対義語」「慣用句」「四字熟語」「評論用語」などのページに繰り返し目を通すこと。さらに、上記の「語彙ノート」に例文を書き写すようにすれば「文脈の推理力UP」にもつながり一石二鳥である。③漢字に関しても、本年度は1問しか出題されなかったとはいえ、10問ほど出題された年度もあったので問題集を1冊は仕上げておきたい。また、ここでも「意味がわからない語句」が出てきたら、意味を調べて、「語彙ノート」に加えておくこと。

第二に「長文読解対策」である。今年度出題された文章は、唐戸信嘉『ゴシックの解剖:暗黒の美学』(青土社)からのものだった。本文内容は多岐にわたるが、例年、本格的な硬質の評論文ではなく、平易な表現で書かれた評論あるいは随筆(エッセイ)であり、高校生にも読みやすい文章が出題される。とはいえ、練習は必要である。具体的な対策は以下の2つ。①標準的な問題集を用いて、さまざまなテーマの、4000字以上の長文を読むことに慣れておくこと。②本文の内容を正確に読み取るために、一文の組み立て、段落の組み立て、本文全体の組み立てなどを意識しながら本文を読むこと。

第三に「文脈把握力」と「論述力」をUPさせることである。本年度全18問中9問は「空欄や傍線部前後の文脈の把握力」で決まる設問であり、毎年1問出題される50字以内の記述問題は「傍線部前後の文脈から読み取ったヒントを正確な日本語で文章化する力」で決まる設問といえる。具体的な対策は以下の2つ。①空欄や傍線部前後の「言い換え」「対比」「因果関係」を意識的に探す練習をすること。②30字～60字程度の解答字数の記述問題を集中的に演習すること。①、②を両方満たすためには、本学の過去の入試問題を解くのはもちろん、記述問題中心の問題集を1～2冊こなすことも必要である。